

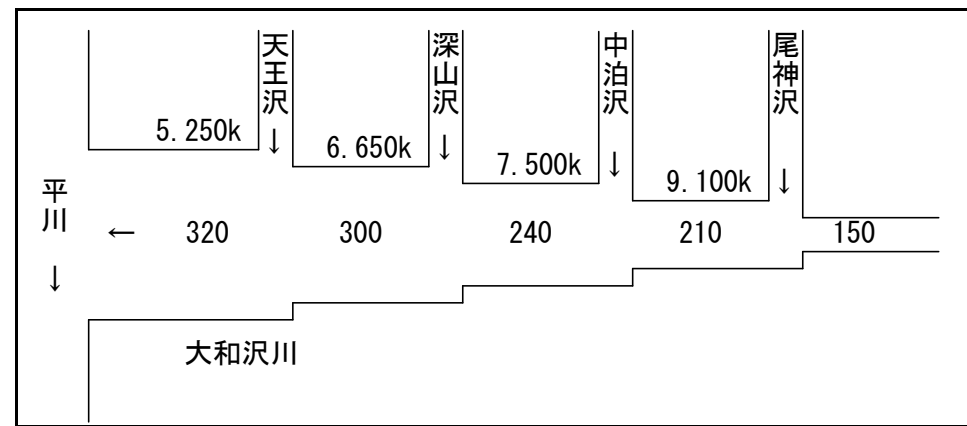
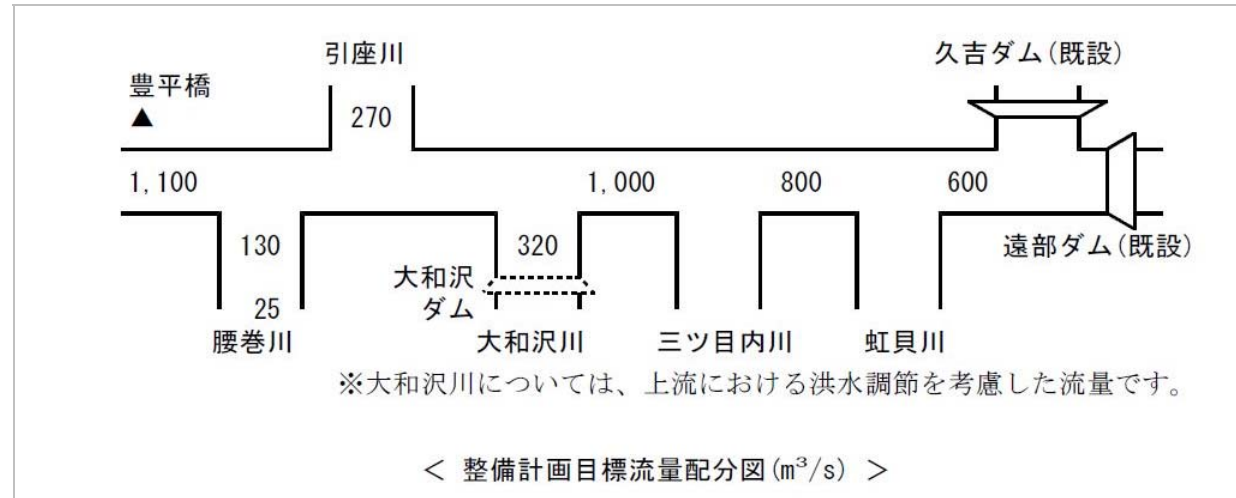
平成 22 年度公共事業再評価等審議委員会からの附帯意見に係る対応状況について

項 目	治水ダム建設事業／大和沢ダム
<p>【附帯意見の内容】</p> <p>ダム建設中止後の大和沢川の治水対策については、これまで治水安全度 1 / 40 で検討してきた経緯を踏まえ、引き続き詳細な調査・検討を行い、当委員会へ報告するとともに、地元への情報提供を適時・適切に行って、十分に理解を得ながら事業を進めること。</p>	
<p>【これまでの対応状況】</p> <p>大和沢ダムについては、従前より本委員会の御審議をいただいておりますが、平成 22 年 9 月 28 日国土交通大臣から事業の検証に係る検討の要請があり、本委員会の答申を受けた知事の判断に基づき、平成 22 年 12 月 3 日国土交通大臣へ事業中止の報告を行っており、平成 23 年 3 月 1 日に開催された国の「今後の治水対策のあり方に関する有識者会議」の審議を経て、平成 23 年 5 月 19 日、国の補助金交付に係る対応方針として中止と決定されたところであります。</p> <p>大和沢ダム建設中止後の大和沢川の治水対策として、岩木川水系河川整備計画（指定区間：弘前圏域）に定められた治水安全度 1/20（治水基準点での計画高水流量 320m³/s）での河川改修計画の策定、及び課題となっている治水安全度 1/40 へ向上させる為の手法の検討について、取りまとめを終えたことから報告致します。</p> <p>①現況河道に 1 / 20 流量が流下した場合</p> <p>中流及び上流の約 6.9 k m の内、約 5 k m の区間及び下流 2.2 k m では現況断面で 1/20 流量 320 m³/s が概ね流下可能（現況で堤内地へ溢れない、下流区間は堤防高で評価）</p> <p>② 1 / 20 対応河道へ改修</p> <p>下流区間では堤防の余裕高 80 c m が確保されていないことから、築堤及び一部掘削が必要 中流区間でも同様に一部築堤、掘削が必要、上流区間では大半の区間で河床掘削必要</p> <p>③ 1 / 20 対応河道に 1 / 40 流量が流下した場合</p> <p>上記の改修実施後の断面（1 / 20 対応河道）で 1 / 40 流量 370m³/s が流れた場合、下流・中流区間では計画高水位（HWL）からの水位上昇量は最大で 25 c m（堤防余裕高 80 c m に包含）、上流区間では堤防高（現況地盤高）を上回る区間が約 200m 程度発生</p> <p>④ 1 / 40 対応河道へ改修</p> <p>1 / 40 流量を計画高水位（HWL）以内に収めるには、上・中・下流区間で掘削により対応可能</p>	
<p>【今後の対応方針】</p> <p>今後、岩木川水系河川整備計画（指定区間：弘前圏域）の改定を行うと共に、地元説明会を開催する等により、沿川住民への情報提供を行い、治水対策を着実に進めて参ります。また今回、治水安全度 1 / 20 河道完成後の更なる治水安全度の向上については、掘削により対応可能であることが判明したことから、将来、岩木川本川及び平川の計画流量が増大して整備計画が改定された段階において対応して参ります。</p>	

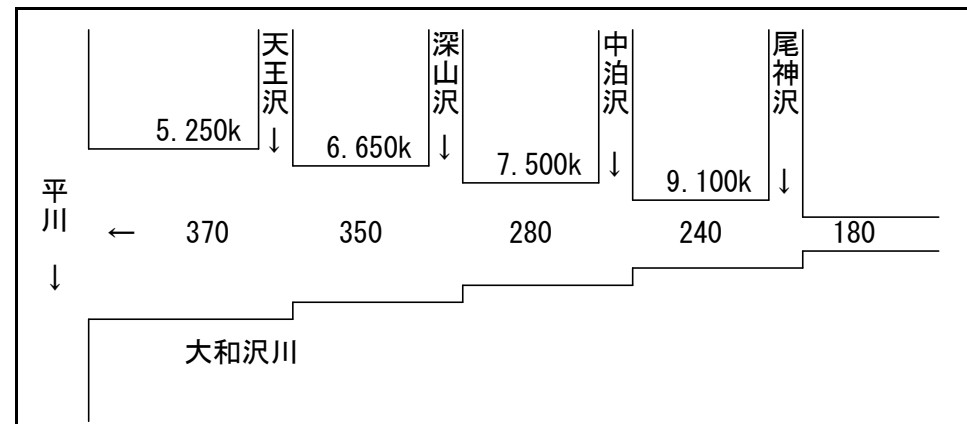
1. 計画高水

「岩木川水系河川整備計画（指定区間：弘前圏域）平成 22 年 10 月青森県」に定められている、大和沢川の治水基準点川合地点における流量 $320\text{m}^3/\text{s}$ は、上流洪水調節施設を考慮した場合は 1/40 年確率規模相当、考慮しない場合は 1/20 年確率規模相当である。

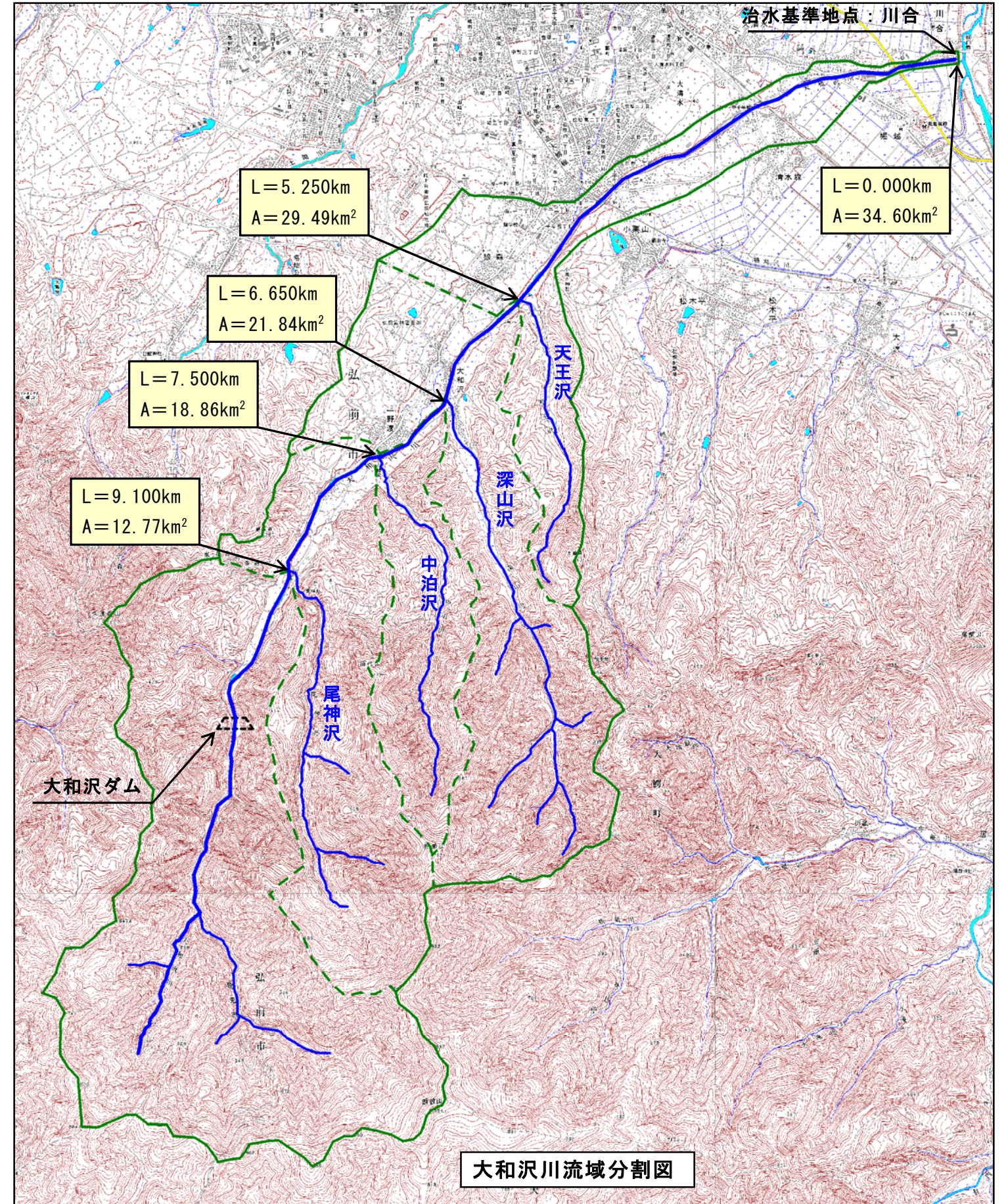
また、平川治水基準点豊平橋地点流量 $1,100\text{m}^3/\text{s}$ は、1/20 年確率規模相当となっている。



大和沢川 1/20 年確率基本高水流量配分図

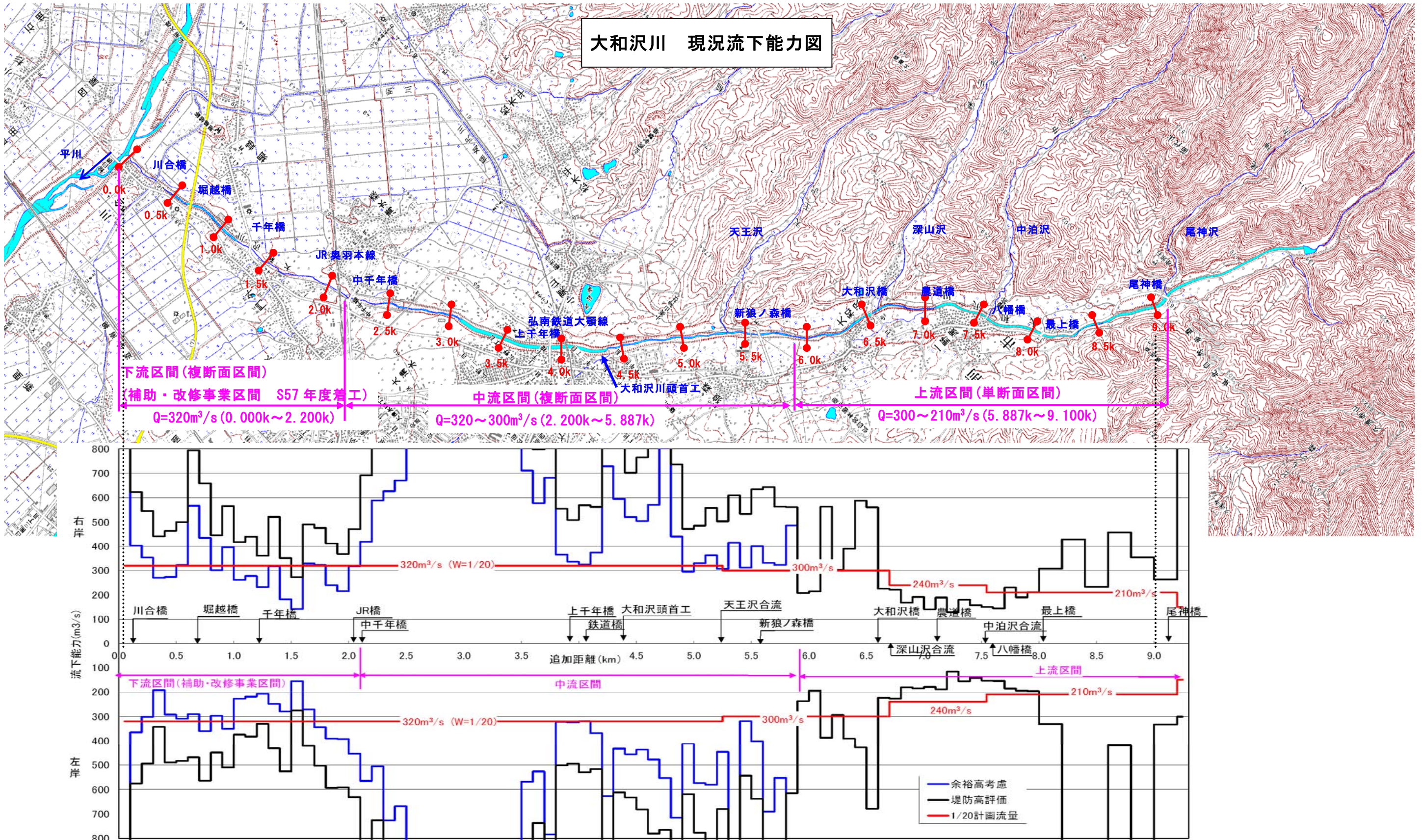


大和沢川 1/40 年確率基本高水流量配分図



2. 現況流下能力

現況河道の流下能力は、1/20年確率規模計画流量に対し、下流区間(平川合流点からの距離0.000km~2.200km)で最大約180m³/s、中流区間(同2.200km~5.887km)で最大約30m³/s、上流区間(同5.887km~9.100km)で最大約130m³/s不足している。



3. 1/20年確率規模対応の計画河道

(1) 計画河道設定方針

以下の方針に基づき、計画河道を設定した。

① 平面計画

- ・ 現況河道線形を基本とする。

② 縦断計画

- ・ 計画河床高および計画河床勾配は、概ね現況の河床高となるように設定。
- ・ 設定した計画河床高で河床を修正し、不等流計算水位を包絡するよう計画高水位を設定した。なお、上流区間については、掘り込み河道であるため、計画高水位は地盤高程度となるように配慮した。

③ 横断計画

- ・ 断面形状は現況河道なりに、下流および中流区間は複断面、上流区間は単断面とした。
- ・ 河幅については、各区間の標準的な現況河幅程度となるように設定した。

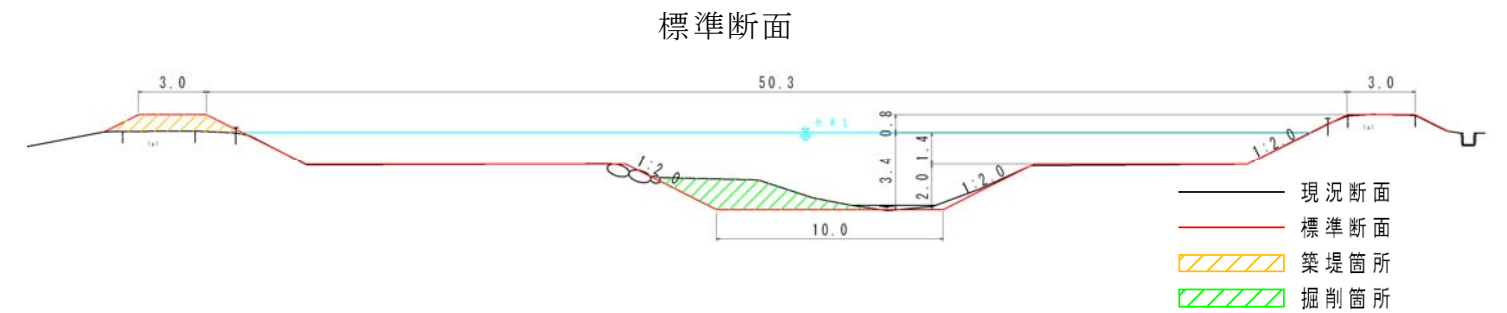
(2) 改修概要

下流区間については、河床修正(0.100km~0.340km)及び堤防の築堤(0.750km~2.150km)を行う。

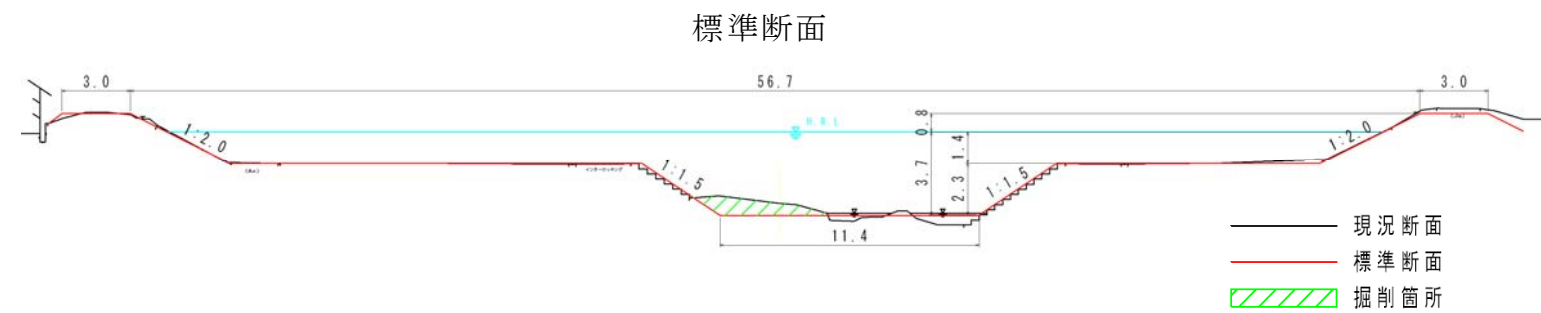
中流区間については、流下能力が不足する箇所、河床修正(3.800km~4.300km、5.350km、5.600km~5.850km)や堤防の築堤(4.890km~5.300km)を行う。

上流区間については、(5.950km~8.400km)について、河床掘削や床止め工の撤去を行う。

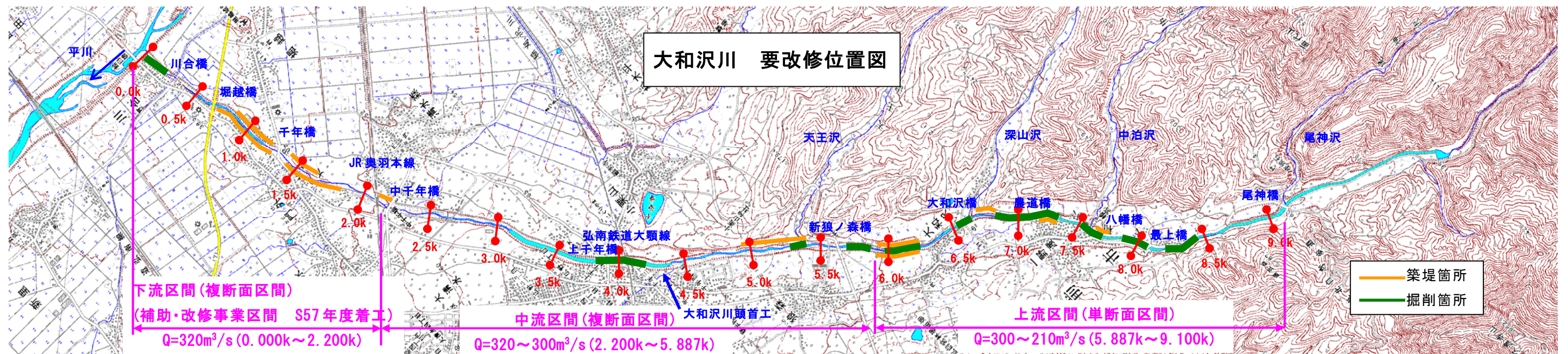
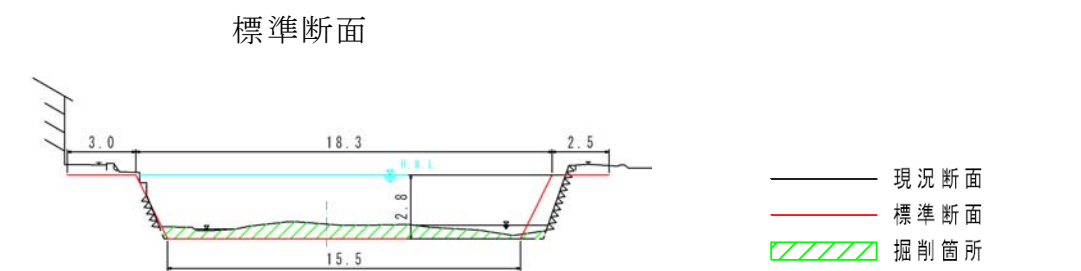
< 下流区間(0.000k~2.200k) >



< 中流区間(2.200k~5.887k) >



< 上流区間(5.887k~9.100k) >

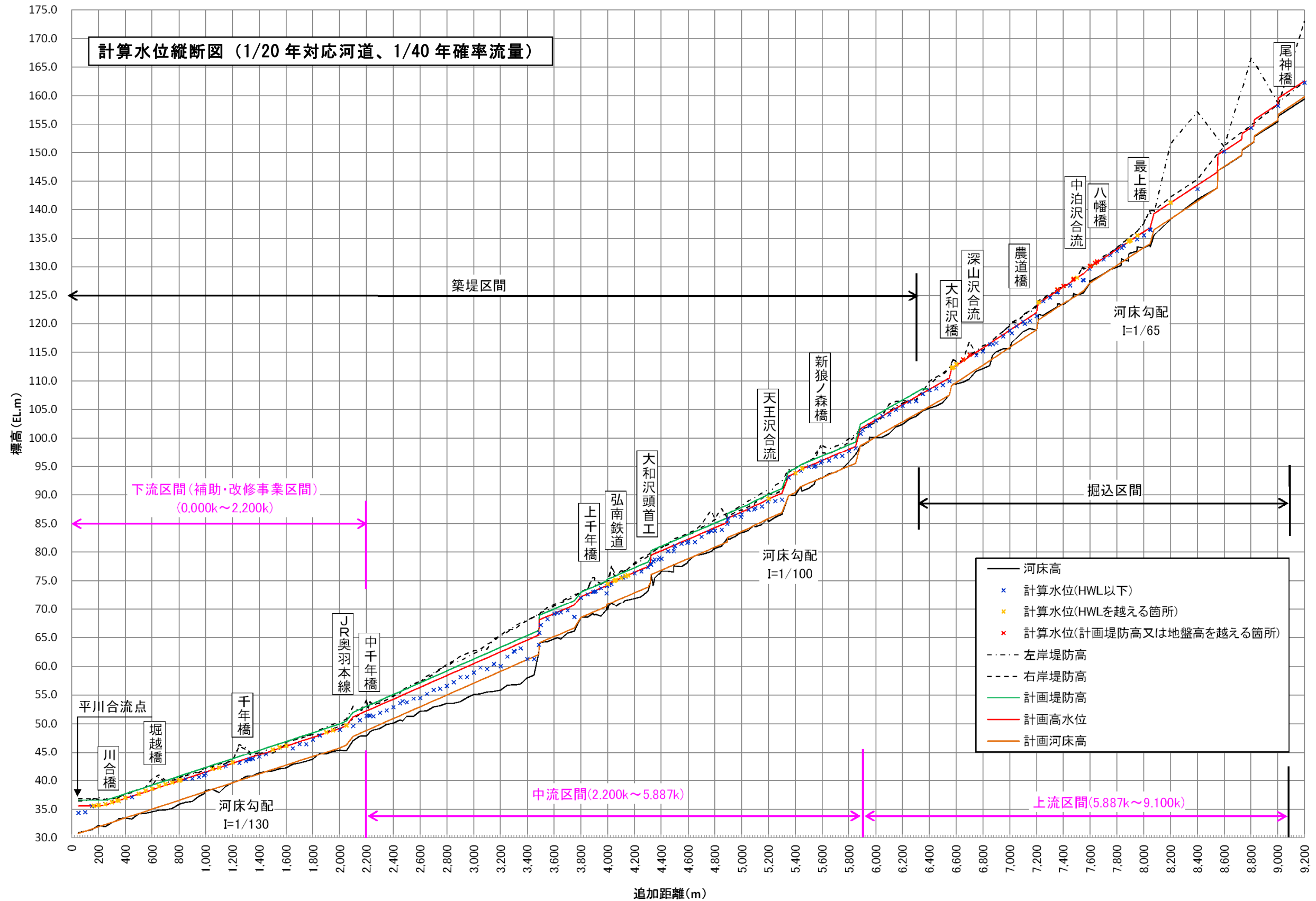


4. 1/20年確率規模対応改修後の河道に1/40年確率規模の洪水があった場合の水位状況

1/20年確率規模対応改修後の河道に、1/40年確率流量規模の洪水があった場合の計算水位は下図のようになる。

下流区間、中流区間では、計画高水位を上回る箇所があるものの、築堤高を越えることはない。(下図の×参照)

また、上流区間では、6.650km～6.700km、7.354km～7.473km及び7.595km～7.650kmで、現況地盤高を最大約24cm上回る(延長約224m)。(下図の×参照)

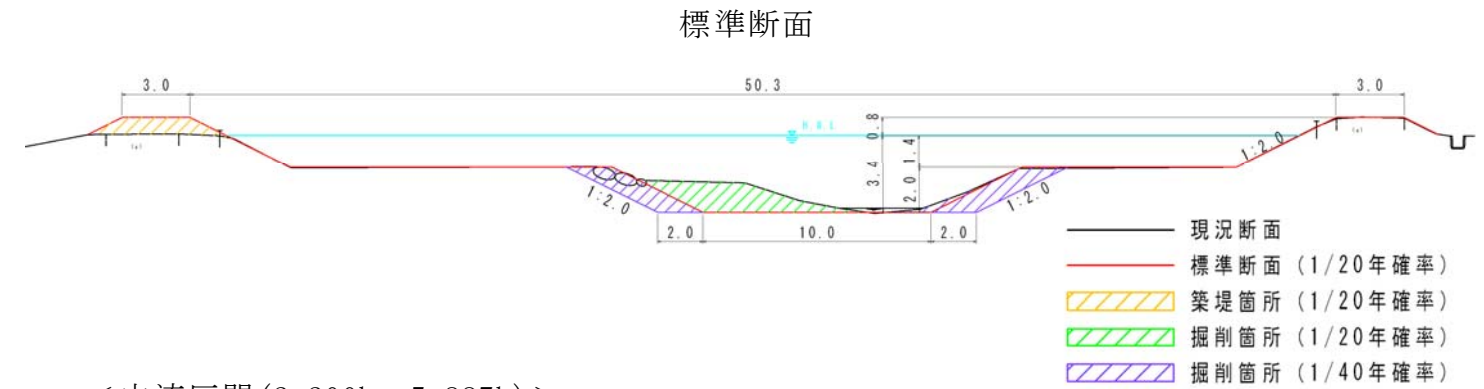


5. 1/40年確率規模対応の計画河道

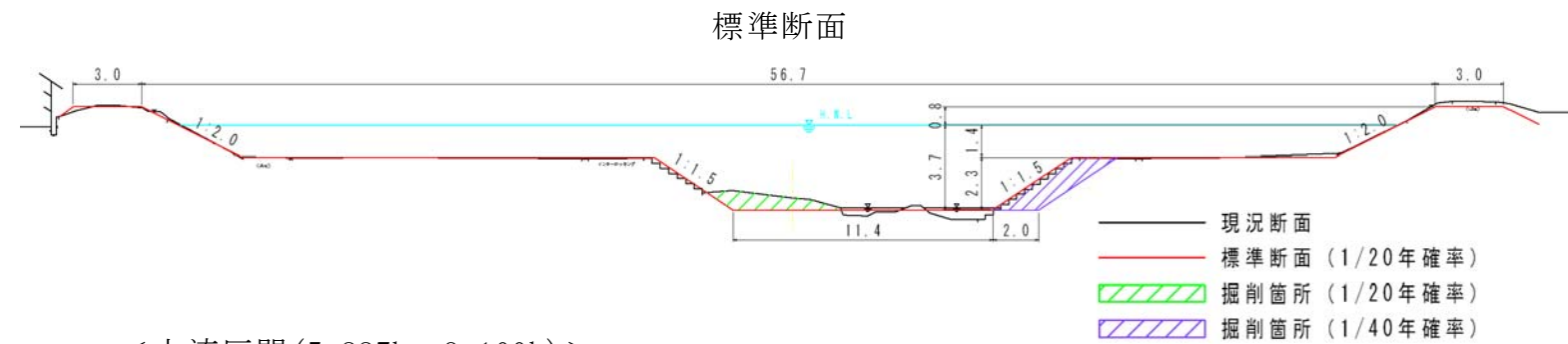
1/20年確率規模対応の計画河道から1/40年確率規模対応の計画河道とするためには、以下の改修を要する。

- ①下流区間については、1/40年確率流量に対し、流下能力の不足する区間について、低水路の拡幅（0.050km～0.600km、1.000km～1.150km、1.700km～1.800km）を行う。
- ②中流区間については、1/40年確率流量に対し、流下能力の不足する区間について、低水路の拡幅（5.350km～5.450km）を行う。
- ③上流区間については、1/40年確率流量に対し、流下能力の不足する区間について、河道の拡幅（6.550km～6.600km、7.213km～7.600km、7.832km～7.952km、8.200km～8.400km）を行う。なお、河道の拡幅は片岸拡幅を基本とする。

<下流区間(0.000k～2.200k)>



<中流区間(2.200k～5.887k)>



<上流区間(5.887k～9.100k)>

